

Recommendation

01 都市づくりは、面白い仕事だ！！



「いま、都市をつくる仕事 一未来を拓くもうひとつの関わり方」

編集：日本都市計画学会関西支部 次世代の「都市をつくる仕事」研究会 定価：1,995円 レビュー：三矢 勝司(りた)

関西でまちづくりを推進して頑張っている世代・30代の事例を集めた『都市をつくる仕事』の今を紹介した書籍です。僕が入ったのは、レトロなビルの魅力にフォーカスを定め、あちこち古いビルの活用を繰り広げる『ビルニアカブ』や、アーティスト(身体表現)が空き家活用を身を出し出した『空き家再生(ウォーマンズ)』です。また、まちづくりを進めるためには「大きな計画と小さな見通しが大切」とする論考にも共感を覚えました。紹介されている数々の事例をみると「面白いことやってんなー」「楽しそうだなー」と思ったのが率直な感想です。りたの活動も傍からみたら「面白いことやってんなー」と見えているでしょうか。気になることところ。

東アフリカの野生動物保護のために

『2012年オリジナルカレンダー』

製作者：宇野 晋安 定価：1,000円 レビュー：岡田 貴浩(りた)

製作者の宇野晋安さんは、岩津で動物病院を営む獣医さんで、このカレンダーに掲載されている写真はすべて宇野晋安さんが東アフリカで撮影されたものです。収益金は全部東アフリカの野生動物保護を目的とする「マサイマラ巡回家畜診療プロジェクト」に寄付されます。購入は宇野獣医科病院まで。在庫が限られていますのでご注文はお早めに。



購入先 宇野獣医科病院 岡崎市岩津町車庫5-1 TEL 0564-45-7461 FAX 0564-45-7650

02

あるもの探しを始めれば、たちまち村が家の宝庫に。

『地元学からの出発』

著者：結城 啓美世 定価：2,730円 レビュー：深谷 紗子(りた)



この本は著者自身が実際に地域再生を目指して集落へ足を運び、そこに住む人の声に耳を傾け、一緒に汗を流した記録です。今日日本の農業従事者の6割が60歳以上、そのうち7割が70歳以上という状況の中で、農政が切り捨てた小農の部、それが成り立つ世の中の仕事をももう一度考えるべき時だと私は感じています。著者は問題提起しながらも、人々が可能性を感じ続けられれば輝きを取り戻せることを教えてくれています。地域再生の論は「ないもの探し」をやめ「あるもの探し」を始めることです。あるものを大事に守り育て、広めていくこと、これが地元学の原点だと私は理解しました。個人的には2009年の時点ですでに「エネルギーの地産地消」を訴え、取組みを始めた地域があったことが興味深かったし、地域が一丸となって地元農業を支える取組み「晴子の米プロジェクト」には大きな可能性を感じます。地元は元気があった！先行きは明るい！そんな姿を見てくれる1冊です。

03

そもそもまちとは何か？ について、考えてみよう。

『存在と時間(上)(下)』

著者：マルティン ハイデッガー 翻訳：細谷 典雄 定価：1,260円 レビュー：三矢 勝司(りた)

20世紀を代表するドイツ哲学者・ハイデッガーの代表作の一つ、「ある」とは何か、について論じた名著である。例えば、コップの存在を規定しているのは「ここにコップがある」という事実、つまり「ある(存在存在existence)」を意味している側面と、「これはコップである」という事実、つまり「ある(本質存在essence)」を意味している側面の両方があることを提示している。ここから議論を広げれば、私達にとって「まち」とは、どういふ存在であろうか。「建てる場所がある」ことだろうか？「自分の居場所や表現の場である」ことだろうか？「これは私達のまちである」という愛着をもてるまちづくりを、りたは進めているわけであるが、それは市民一人ひとりによって、まちの意味や価値を理解・理解されている状態をさす。そんな「まちとは何か」を根源的に追求したい人におススメの本です。



Literacy まちのミカタ

ID_000055

Literacy

EVENT SCHEDULE

1 January

8 日 11:00 ~ 13:00
新年行事の定番。お汁めのサービスもあります
やはざかん 餅開き(四字熟語かるた大会)
19 木 11:00 ~ 12:00
ポランディアに興味がある方、必見！
ポランディア茶話会

11 土 18:00 ~ 20:00
生かそう！つなごう！届けよう地域の力
北部地域活動報告会
11 土 18:00 ~ 20:00
漁山寺が炎に包まれる！愛知県無形民俗文化財
滝山寺指塔まつり

28 土 13:30 ~ 15:30
何かが始まる！よりなんに集まれ！
よりなん交流会
外国人の方が日本語の歌を歌いごみ客容を軽しします
外国人の方が日本語の歌を歌うのど自慢vol.2

19 日 14:00 ~ 17:00
「市民活動」ポランディアのきかげつくり！！
第1回 岡崎まち育てフェスタ
市民活動団体の方、「情報ひろば」を更新していますか？
「おかせき市民活動情報ひろば」入力支援

2 February

4 土 13:00 ~ 16:00
外国人の方が日本語の歌を歌いごみ客容を軽しします
外国人の方が日本語の歌を歌うのど自慢vol.2

2/28 火
「おかせき市民活動情報ひろば」入力支援

テーマ：「まちになる」

最近、竜美丘地区の住民の方とお話をする中で、気になったことがある。ご存知の方もいらっしゃるかも知れないが、竜美丘地区内のケヤキ並木道の整備を巡って、地域の中で議論が起きているらしいというも、行政が道路と歩道の整備を目的として、立派に育ったケヤキ並木道を伐採していることに対して、異を唱える(ケヤキを守りたい)住民の方々がいらっしゃるためだ。このやりとりを聞いていると、中心市街地・康生地区内にある「シボコ西広場」の整備事業(2007年)のことを思い出す(詳細は、りたブックレット3「協働都市文化をもたす図書館づくり」参照)。この時は、行政が進めようとした既存の樹木伐採型の広場計画に対して、異を唱える市民の行動や提案から始まり、市民と行政の対話の場を開く中で、「既存樹木を全て伐採する」ではなく「既存樹木を全て保全する」でもない、第三の道「既存樹木を一定程度残しながら、しかし既に弱っている樹木を一定程度伐採する」計画へと着地した。もちろん、行政の言い分としては「落ち葉を片付けるのが大変だという周辺住民からのクレーム」「鳥の糞が落ちてくるというシボコ利用者からのクレーム」があり、その問題解決のために、樹木伐採を基本とした整備計画を策定したことは、一定の道理がある。つまり行政は「市民の声を受けて、緑を無くす判断をした」のだ。方や「都心部には、豊かな緑と水辺、ほっとできる場所が必要」とする「都市のあるべき姿」を標榜する市民の存在があったことも事実だ。しかし、こうした「うらだたらない」という市民意見は「これは嫌だ」という市民意見にかき消れてしまいうのが現実である。竜美丘地区でも同様の構図が見て取れ

る。行政にとっては「落ち葉を落とす(根が張ることや歩道や道路が歩きにくくなる)ケヤキは、市民のクレームの根源」ではないかも知れない。一方で「竜美丘といえば、緑豊かで閑静な住宅街。それに憧れて、竜美丘に住んだのに、どんな緑が無くって行くのは嫌だなぁ」と思う住民もいるであろう。これに対して僕は「まちづくりには、対話と協働が必要だ」と言いたい(そう思うからこそ、岡崎まち育てセンター・りたを設立、運営している)。理想主義者と目されるかも知れないが、

伝説の コラムニストが語る！
三矢勝司の だとすると
三矢勝司 | KATSUSHI MITSUYA
HNSA岡崎まち育てセンター・りた事務局

ことを克服し、その過程でコミュニティが育まれ、道を歩いても近隣住民と会話ができる。自分たちがまます近所の人に許容してもらえらる等)を、もっと自覚的かつ計画的にまちの中に実現し、享受する」のが、(手間がかかるが)総合的にみて賢い解決策ではないか。

「これが嫌だ」から「こうだつらいいな」が実現するまちにするには行政と住民の「対話と協働」が不可欠である。地域の問題解決力の維持・向上の過程こそ、「まちになる」道だ。

「ケヤキの落ち葉の処理が大変だ」というのであれば、その課題を沿道住民だけの負担にするのではなく、周辺住民を含めて負担を分かち合う方法は無かったのだろうか」とか「子どもを見守り活動をした後、少し落ち葉を拾う活動もやってみる」とか、とにかく「もっと違う方法(解決策)もあつたらんか」といった思いに駆られる。というのは「ケヤキ並木問題を、市民と行政、住民同士で話し合い、解決策を模索しないことが、地域の問題解決力の維持・向上を阻んでいる」とも考えられるからだ。この「面倒なことを無くすことが、更に面倒な社会問題を孕んでいく構造(地域の問題解決力の低下と、コミュニティ崩壊の進展と、まちの地域化悪化の連鎖)」は、豊かな岡崎つくりにはつながらない。だとすると「一定の面倒なことを許容することが、まちを元気に維持する処方箋」ではなからうか。むしろ「一定の面倒なこと」の先にある楽しいこと(自分達で面倒な

公的：「社会化する『若者の主張』」

学生団体「DASH MAN」

「若者は意見を言わない。」この偏見を一石を投じるべく、若者達が立ち上がった。彼らの名は「DASH MAN」。2007年、まだ高校生だった彼らは討論イベント「WE CAN STAND UP」を立ち上げ、日頃鬱積していた自分達の想いを大人たちにぶつけた。そして大学生になった彼らは「DASH MAN」としてよりダイナミックに、力強く、大人、そして社会に対して主張し続けている。彼らは一体、どんな活動を展開し、何を主張しているのか？

▼DASH MANのメンバー WE CAN STAND UPの一幕



1. DASH MANとは？

「今どきの若者は意見を言わない。」そんな社会の偏見に問題意識を感じた学生達が立ち上がった。彼らは学生団体「DASH MAN」を組織し、若者の声をもっと社会に届けるために、また、同世代の若者にもいろいろな経験ができる場を創出するために様々な活動を展開している。メンバーは岡崎在住の大学生を中心に構成

されているが、とくに名簿が存在するわけではなく、プロジェクトごとにやりたい人が随時活動に参加する。緩やかな繋がりを持った組織だが、彼らの取組みは実に意欲的で、どれも大人顔負けのダイナミックな仕掛けばかりである。中には「主張」をテーマにした活動を見ても、その活動の面白さや意義が、大人に比べてはるかにわかりやすい。そして誰に何を「主張」してきたのだろうか。

2. 大人たちへそして社会へ

先述の通り「WE CAN STAND UP」。このイベントは、現DASH MANのメンバーが高校生の頃に立ち上げたもので、その後、後輩の高校生たちにも継ぎ、大学生になった彼らは運営を兼ねながら、今年で5年目を迎えた。学校や私生活で大人に対して日頃言えないことを主張する場が欲しい。

3. 注目から社会活動へ

★POWER OF MUSIC★先述の「WE CAN」を経てDASH MANを組織した彼らは2008年8月、世界の貧困撲滅キャンペーン「One Japan」の活動支援として、環境省環境問題キャンペーン

活動の支援を目的に、音楽チャリティーイベント「POWER OF MUSIC」を日本の学生で合同開催する。高校の頃大人たちへ主張してきた若者は世界を取り巻く課題に目を向け、国境を超えて環境問題をテーマに熱い議論を戦わせた。

★ラジオ番組制作★

さらに彼らは、もっと広く自分達の声を届けるべく、メディアに自分達の主張を乗せようと、ラジオ局に企画書をもち込んだ。制作費は企業に協賛をお願いするなどして彼ら自身が調達した。かくして2009年4月～12月毎週土曜、CBCラジオにて彼らの名を冠した番組が放送された。社会で話題になっている問題などに、彼らなりの視点で考え、彼らの言葉で社会に発信していくという主旨だ。毎週テーマ（ゆとり教育、裁判員制度、選挙など）にそった専門家の方を交え、若者vs専門家で討論した。

また同年8月には彼らが毎週訪問している児童養護施設「平和学園」に突如発生した経済的負担の増加を救うべく「ムッシュかまやつ・泉谷しげる」トーク＆ライブを開催、約300人の動員を記録し、収益金を同学園に寄付した。このライブでは、出演者2人とDASH MANのトークショーを通じて彼らの主張を社会に発信している点でそれまでの彼らのイベントスタイルを踏襲していると言えるが、決定的に違うのが、それまでは「主張すること」自体が目的であったのに対し、このイベントでは、「主張すること（＝トークショー）」は「平和学園を救いたい」という企画を盛り上げるための手段となっている点である。

★ダッシュ塾★

さらに2011年2月からは小学生を対象とした無料塾「ダッシュ塾」を開講している。家庭の経済状況によって受けられる教育に格差が生じ、悪循環がまわっている昨今。このような環境を若者の力でなんとかしたいという想いを、



▲小学生のための無料塾「ダッシュ塾」

岡崎青年会議所「岡崎・幸田まちづくり応援基金」の助成を獲得し、実施にこぎつけた。彼らの主張は今や、未来を開くための手段へと進化（＝社会化）しているのだ。

DASH MAN 活動年表		□ 討論会	■ 実践的活動	★ その他
2007年 8月	WE CAN STAND UP	□	■	★
2008年 8月	★DASH MAN設立	□	■	★
	Power of music開催	□	■	★
	第2回WE CAN開催	□	■	★
	□平和学園訪問を始める	□	■	★
	(週1回、教人へ訪ねて子どもたちと遊ぶ)	□	■	★
	□CBCラジオ (同年12月まで)	□	■	★
2009年 4月	□チャリティートークライブ	□	■	★
8月	□第3回WE CAN開催	□	■	★
12月	□「全人類の主張 in りふら」ナリふらまつり支援	□	■	★
2010年 2月	□岡崎JC「岡崎・幸田まちづくり応援基金」に無料塾プロジェクトが採択される	□	■	★
7月	□野外討論イベント「健康NEXT会議」出演	□	■	★
8月	□第4回WE CAN開催	□	■	★
	□無料塾「ダッシュ塾」開講	□	■	★
2011年 2月	★新成JCで講演会 (新成の学生たちに刺激を与える)	□	■	★
4月	★「なごみん横丁」企画・運営支援	□	■	★
8月	□第5回WE CAN開催	□	■	★

もっと「DASH MAN」のことが知りたい方はコチラをCHECK!

- ホームページ
URL: <http://dashman.web.fc2.com/>
- 問い合わせ先
副代表 平野 亮人(りょうと)
e-mail: dash-man.hira-to@hotmail.co.jp

NEWS WORLD HISTORY SWG

「DASH MAN」の活動は、単に学生団体の活動にとどまらず、社会に対して積極的に発言し、行動を起こしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。

「DASH MAN」の活動は、単に学生団体の活動にとどまらず、社会に対して積極的に発言し、行動を起こしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。

「DASH MAN」の活動は、単に学生団体の活動にとどまらず、社会に対して積極的に発言し、行動を起こしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。

「DASH MAN」の活動は、単に学生団体の活動にとどまらず、社会に対して積極的に発言し、行動を起こしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。

「DASH MAN」の活動は、単に学生団体の活動にとどまらず、社会に対して積極的に発言し、行動を起こしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。

「DASH MAN」の活動は、単に学生団体の活動にとどまらず、社会に対して積極的に発言し、行動を起こしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。彼らの活動は、社会の隅々まで届き、多くの人々の心を動かしている。